鷲山講

目次

篇章

一、5、懺悔論　窪田純榮

一、7、實感と解脱　笹川眞應

七、1、（一）本尊に關する考察點　（二）信智の關係　本多日生

十二、施無畏　山根顯道

教學財團設立に就て　釋天順

（其二）

日什聖人撰文諷誦章卷上　坂本日桓

法華經形體論　國友不々居士

雜報

一、發心　5　懺悔

懺悔論

窪田純榮

そも〳〵吾人の所謂懺悔とは何ぞや、

懺悔とは則ち懺罪悔過の義にして、前非を發露し將來を慎ひの所行なりとす、而して佛陀所證の大法を信受し奉る、澆季濁惡の吾人凡夫は、日夜に發露懺悔の思念を忘るべからず、亦在家出家の別を問はず、懇意用心して必らず徹到すべきを要す、佛陀の大慈大悲は常恒に吾人を護念し、宿世に造作せる一切の業緣一切の罪惡を、慚愧發露し懺悔後悔するに對し、右の御手を伸べ行者の頭を撫でゝ、善哉善哉汝は大乘を行ずる者なり、汝は大莊嚴の心を發せる者なり、汝は大乘を念ずる者なりと讃歎し給はん、

吾人は幸ひにして此の大乘妙法に遇ひ奉り、今や無始已來の深重なる業障を消滅せんとす、如何に尊とくして而かも悅ばしきことよ、佛陀の眞實なる法子と呼ばれ、佛陀の衣の御袖に覆はるゝ處の、こよなふいみじき果報を備ふる、我等にてありけるなり、

されば此の經を持つものは、即ち佛身を持ち即ち佛事を行ずるなりと、佛陀は經に說きおかせ給ひぬ、然るに無明の重雲にとざされ、永く流轉生死の巷にさまよひ、無始より

このかた生生死死の間に輪廻して、冥さより冥さに入り長く佛名を聞かず、德薄垢重貧窮下賤の身を受け、常に五欲に貪着して憍恣の心を起し、雜遭の想ひを生ずること能はずして、憶想妄見に墮すること實に久し、此の罪業の因緣深き處の吾人は、宛かも父にておはし母にておはせる如き、佛陀の大慈大悲を仰ぎまつりて、茲に無始已來の謗法重障を發露懺悔し、其暖かき救ひの御手にすがりて、此の五塵六欲の境を離れんと欲す、

吾人が無始已來生生世世に於て造りし所の罪業、之を山に比べんか山尙ほ低し、之を海に譬へん歟海又淺し、此の山海に喩へかたなき無始の罪業、それ雲の散り霧の消ゆるが如く、如何せば滅除することを得べきぞ、唯本門壽量の木尊の御前に詣でゝ端坐し、至誠に發露懺悔するの外あらざるなり、發露懺悔とは則ち悔ひ改むるの謂ひにして、例せば樹根を露出するに枝葉忽ちに凋落するが如く、無量の罪業を發露するときんば、無明深重の罪根は直ちに焦枯するに至る、是れ正しく過ちを悔ひ行ひを立るの基本にして、要は妙法の本濟力と佛陀の大悲願力と、吾人の信念力との三者相應して發露懺悔の眞意を完ふすることを得るなり

吾人は宛かも明を失へる盲人の如し、『其中衆生悉是吾子』と佛陀は說かせ給へども、無明の障り厚ふして未だ佛陀を見奉ること能はず、覩ざるを以ての故に常に佛前に於て種種の

過惡を造ること、普賢菩薩經に說かせ給ひたる盲人に似たる哉、今吾人は之を略叙せんか、

凡聖一堂筵にありて供養を爲せり、多くの盲人此の中にあり自己の眼なきを以て、遂に衆の前に於て種種の過惡を造り、而して他人の知る者無きを信す、時に智人あり之を愍みてやまず、故に盲人に語つて曰、此の堂に多くの凡聖僧衆あり、汝等是に對して公然と惡を造れると、盲人備さに聞已つて慚愧怖畏し、其過を謝するに處なし、遂に意を申べて僧衆に告白して曰く、弟子某甲敬つて合堂の師に白す、弟子福無して少より來た明を失ふ、師等と同じく一堂にありと雖、覩見し上ること能はず、見ざるを以ての故に遂に師の前に於て、過として爲さざることなし、今善友の開導するに因つて、始めて師あることを知りぬ、慚愧怖畏具陳すべからず、弟子今合掌し師等に從つて、哀を求めて懺悔す、唯願くは師等弟子が誠を歸し懺悔するを受給へと、

嗟吾人は實に此の盲人に似たることよ、彼の盲人等は自から明なきを以て、他の僧衆を見ざるが故に種種の過惡を造れり、吾人も又此の盲人のそれの如くに、無始已來種種の過惡を恣まゝにして、常に諸佛照鑑のみ前に於てす、蓋し諸佛の知見せらるゝや論なし、諸佛の知見は晰らかに照して、毫釐も盡さずと謂ふことなく、又遠近を論ずることなかれ、明闇內外宛かも掌珠を觀るが如し、

彼の盲人の一堂の僧衆を見ざるが如く、吾人も佛陀の照鑑を知らずして、無始已來罪業の因緣を造れること、算數比喩の及ぶべからざる處ならん、然るに彼の智人の盲衆を愍むが如く、佛陀の大慈は吾人を憐みて、救ひの福音を吾人に傳へ給へり、則ち發露懺悔の敎是れなりとす、

想ひ見よ彼の盲人に似たる吾人が、無始已來生生死死の間に於て造りし所の過罪を、所謂眼根は諸色に惑着して諸塵を貪愛し、耳根は惡聲を聞きて和合の義を破壞し、鼻根は諸香に貪着して染觸の害を起し、舌根は五種の惡口を恣まゝにして非義の語を說き、身には殺盜婬を行じて六賊の遊戲に委し、心には諸の不善を念じて十惡を造る等、一猿六窓尙且豐に足らざるなり、斯の如く六情根によつて種種の過惡を犯し、過去生生惡道に墮せること、蓋し稱計すべからざるなり、嗚呼如何してか永く此の苦患を離れ、此の衆惡を滅除することを得べけんや、

特に其根本罪業と稱すべき、無始已來の謗法重障、影の形に從ふが如く常恒に纏綿し、而して吾人を生生死死の間に束縛して、出離解脫の要路に遠ざからしむ、豈悲むべきの事にあらずや、然るに吾人は宿福深厚にして、今や十界の中間に生を受たり、若し此の時を逸せば果して何れの時か往詣靈山の素懷を達して、佛陀の慈顏を拜し奉ることを得べけんや、然るに幸ひにして佛陀所證の妙法蓮華經に値ひ奉れり、將

に佛陀の暖かき慈悲の御手に、罪重く穢れ多き吾人は攝取せられんとす、盲龜の浮木に遇へるに譬へ、優曇華の咲く春に比べんか、實に再びは値遇する事の難きや知るべきのみ、然るを倘し更に謗法の重罪を造りて、却つて還墮阿鼻の痛苦に遇はゞ、如何に悲泣するも其詮なかるべし、洵とに三思三省すべきの最大事にあらずや、

玆に於てか吾人は先つ謗法重障の根本罪を、發露し懺悔して除滅すべきを要す、而して其懺悔法とは、大寶積經優婆塞戒經等の相對的所說に依るにはあらず、唯南無妙法蓮華經と信唱し奉る、所謂唱題の一行に外ならざる、則ち絕對的懺悔法之れなりとす、

然り而して懺悔の行規を示せる經典は、法華の結經たる觀普賢經にして、之に依憑するもの〻如しと雖ども、而も所信の法は壽量所顯の妙法蓮華經なりとす、今觀普賢經に說かれたる懺悔の文を抄錄せば、

一切業障海、皆從二妄想一生、若欲二懺悔一者、端坐思二實相一、衆罪如二霜露一、慧日能消除、

文字に膠執するの人あつて此の經文を觀、端坐思實相の句を以て、直ちに迹門の實相觀なりと速斷し、之れ吾人當機の行法にあらずと爲すものあらん、然れども此の實相を以て迹門の觀解とのみ見るは、唯一往の意義に過ぎずして、更に本門の見地より之を論ずれば、この實相の文字底に事の一念三千の、妙法蓮華經の潛めることを了知すべきを要す、

亦慧日能消除の句に拘泥し、此の譬喩を以て迹門の觀念力と狹斷せば、其失當なることを想ふべし、則ち吾人は妙法蓮華經を信ずる、其信念の當相に於て既に事觀の大功德を備ふ、故に慧日は一念信の功德に例ふるなり、然るを唯文字にのみ心醉して、其字中に含蓄せる處の眞意義を沒却することなかれ、

果して然らば吾人が日夜に唱へ奉る、事の一念三千の妙法蓮華經、其信唱の當相に於て既に滅罪の意義を含む故に發露懺悔の益自然に周備せり、されば佛名經及び虛空藏經等の如く、體驅を洗浴して新淨の衣を着し、葷辛を遠ざけ香泥を地に塗り、燒香散華の儀粧を凝らして、發露懺悔の行規を修するが如き、煩瑣迂廻の行儀に重きを措かず、是則ち末法濁世の行人其軌に堪へざると、所信の敎功天地の差あるが所以なり、

吾人の修行に檀戒等の五度を制止し、一向に南無妙法蓮華經とのみ信唱せしむるは、是れ法華經の本意にして、末法初心の行人に對する相應行なりとす、故に大日蓮は判釋して曰く、

初心者兼行二五度一妨二正行信一也、譬如二小船積レ財渡レ海、與レ財俱沒一（中略）、初心者諸行與二題目一並行益全失云云、

斯の如く末法初心の吾人に總ての餘行を制止して、唯專修

唱題の一行をのみ懲懲せらる、是則ち初心の行人は緣に紛動せられて、正行の信を妨くるに至るを以て、爾かく訓誨を垂れられたるなり、然るを何を苦しんでか其本を忘れて末を採り、源を忘れて流れを尊ぶが如く、煩雜至難の行法に齷齪として、以て滅罪生善の筌蹄と爲すや、愚も又甚しと謂ふべし、

涅槃經に云く、譬如下氈華雖レ有二千斤一、終不レ能レ獻中眞金一云云、

此の經文は正行の價値を示されたるものなり、縱し百の餘行之れありと雖も、彼の千斤の氈華の如くにして、吾人が專修唱題の一行は實に一兩の眞金に價ひす、故に末法の行人は貧窮下賤なるを以て、將に一兩の眞金を採るなり、此の一兩の眞金とは何ぞや、則ち妙法蓮華經之れなりとす、

故に複雜多難の虛戯行を捨てゝ、須からく專修正行の唱題を修せよ、釋尊の因行果德の二法は悉く妙法蓮華經の五字に具足す、我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を讓り與へ給ふなり、何ぞ留難多き險徑を歩みて、菩提の大直道に遠ざかり、衆魔群道邪見生死に壞敗せらるゝの、愚を學び痴を街ふものあらんや、

されば澆末の機運に際せる吾人は、日夜朝暮に唯南無妙法蓮華經と信唱し奉るべし、是則ち吾人が本門壽量の本尊の御前に於て、無始已來の謗法重障を發露し懺悔するの、至誠を表白し奉るものなり、此の赤誠を捧ぐると共に大恩教主の釋迦牟尼佛に、大慈大悲の恩惠を感泣報謝し奉るものにして、併せて三師一證一伴の來臨影向の處に於て、今身より佛身に至るまで法華經本門壽量品の肝心、事の一念三千の南無妙法蓮華經を、能く持ち奉ることを自誓受戒を致すにてあるなり

茲を以て南無妙法蓮華經と吾人の信唱し奉るは、則ち至心懺悔の意義と、大恩報謝の感泣と、自誓受戒の誓盟との三にして、此の三者は恰かも鼎足の如く、共に相離るべからざることを、吾人は確かに認識すべきを要するなり、豈に佛名經の如く大寶積經の如く、至難雜多なる相待的懺悔によるの迂を學ばんや、要は唯信念妙法專修唱題の易行、則ち絕待的懺悔法によつて、佛力法力顯に冥に力を合せて吾人が信力を助け、茲に始めて吾人が無始の重罪を消滅せしめて、永く煩惱業苦の三障を解脫せしめ給ふなり、知らずや妙法蓮華經には悉く萬善萬行の功德を具することを、燒香散華の餘行果して何の詮か之れあらん、

末法の吾人は實に初心の行人なり、罪業最とも深重なる衆生なり、餘行徒らに施すも何等得る所なきを想ふべし、故に道場に端坐し若しくは立行にても、南無妙法蓮華經と但信口唱して、爛るが如き熱き信念を捧ぐれば、無始已來の重業は雲散霧消して、月の水に移り響の音に應ずるが如く、佛陀聖衆は必らず來り給ひて、妙法の本濟力に契合せられたる佛陀

の大悲願力によつて、救ひの御手は吾人の頭に垂られ、さだめて善哉善哉と讃歎の御聲を、佛陀は吾人の爲に發し給はんその時に於ける吾人が喜びのさまを、あゝそれ何に譬へんか唯嬉し涙に咽ぶの外なかるべし、いざや無始已來の謗法重障を懺悔せんがために、吾人は異体同心に南無妙法蓮華經と唱へ奉り、往詣靈山の御法の道を辿らばや、

今末法に入ぬれば餘經も法華經も詮なし、但南無妙法蓮華經なるべし、カウ申し出して候も私の計ひにはあらず、釋迦多寶十方の諸佛地涌千界の御計也、此南無妙法蓮華經に餘事をまじへば、ゆゝしき僻事也との、大日蓮の敎訓を拜戴して、唱題專修に勉めよや世の人々！、

（完）

聖語

諸佛正法の玉に歸向し上つて罪を說いて懺悔す今大乘方等經典を誦す此の經は諸佛の色身滅せずと說く汝今見上つることを得ること審實にして爾るや否や釋迦牟尼佛と大乘經典に向ひ上りて復是の言を說け我今懺する所の眼根の重罪障蔽穢濁にして盲にして見る處なし願くは佛大慈を以て哀愍覆護し給へ（以上結經）

只南無妙法蓮華經とだにも唱へ奉らば滅せぬ罪や有べさ來らぬ福や有るべき、眞實也、甚深也、（聖愚問答抄）

一、發心　7　推理

實感と解脫

笹川眞應

綠陰に涼風を迎へるの時期は、早やすぎ天空にかかる玉白は、限なくさゑて、その影を清流に浮べ、塒に歸るを急ぐ鳥や、草間の蟲は、露霜にあこがれ、山邊の景色も、なんとなう、さびれて、吾人は轉た秋思の感慨に打れた、秋思の感慨……それよ、業障の雲を拂ひ、忘想の闇を消す與奪劑となり、かねて欲求する、吾人の大目的を成辨せんとするの、勇氣と精進を起さしめた、

吾人をして信念に安住し、この信念の力によりて、すべての行爲を完からしむる、第一の要素は發心である、釋迦牟尼佛が萬乘の玉坐を捨て、檀特山に世を遁れ給ひしも、人生苦痛の惨狀は、貴賤尊卑の隔てなく、免れがたきを實感し、これを解脫しこれを救濟せんとの、大誓願の下に發心せられたのである、宗敎を奉持するに就て、發心信仰行法解脫は、缺くべからざる、必須條件である、而して、宗敎敎義の正しいのと邪まなのとは、信念に大恐慌を來し、延て行法にも解脫にも、害毒を搆成ことになるから、天台大師の如きは、初發心の時の師を擇と注意せられた、また、發心してから、精神の眞操を壞り、肉體の奴隷となり、闇より闇に、苦に苦を重

ぬる人が、數多ある、これは信念の確立しない結果である、日蓮大聖人は、この哀むべき者に對して、深く信心を採べし慮病にては叶ふべからずと、訓誡を加へられました。

今の黄金萬能の世の中で、學者も官吏も議員も教師も、金の前には節義も人情もない、拜金宗も今日の樣に極度になりては、宗教の傳道及びその感化が困難である、併しながら、この濁世の人を救ふのが、我我の任務であるから、我々は大に活動して、この任務のために斃れる覺悟がなければならない、日蓮聖人の歴史は、我等の儀表である。一時の榮華に耽惑して、臭名を千載に流したる、足利尊氏や、大義名分を明にし、この信念を貫くために、湊川に戰死を遂げ、その忠節魏々として、山河と並び存する、楠公の事跡は、活歴史である宗教家が金のために、節を賣るなどは、さりとて、解脱がわるい、その解脱のわるい拜金宗に故宗した、著名の文士がある、參考に東京毎日新聞の記事を讀むことにしよう、

一書肆、嘗て高橋五郎先生を訪ひ、日蓮上人傳を稿せん事を依頼す、先生算盤を弾き、先づ其價を定め然る後問て曰く、褒めて書くべきか、將た貶すべきか、唯足下の望むが儘のみと

高橋五郎の心事の賤むべき、この賤むべき理想によりて、日蓮傳をものする、今の文士や宗教家の裏面は先づこんなものである、何も金があるから、その人が立派であると、思ふのは間違で、金を公益に使ふのが、則ちその人が立派で、その人が長者の資格があると謂ふべきである、法華經壽量品に、

「諸の薄德の人は、貧窮下賤にして、五欲に貪著し憶想妄見の、網の中に入なん」と

この金言は、財産家も、學者も、すべての人が、心して見るべき經文である、

學者に就て謂へば、萬卷の書を繙き、學理を究めた博士も宗教に暗く、眞理の光明を認むることが、出來なくて、苦悶する人が澤山ある。然るに無識の者が一念至信、靈化を受けて、資生順道の味を嘗めてゐる者に比較すれば、發心しないのと、實感せないから、博士も薄德の人で終ることになる、解脱は宗教に於ける價値で、諸の業障（諸の妄想（妄想は心的作用業障は行爲の結果））を除くことになる、吾人々類は階級的狀態に、眩惑して金のなる木が欲しい、美衣美食がしたいなどの、空想に驅られるゆへ、所謂五欲に貪著し、憶想忘見の網の中に、入ることになる、心に錦を飾ることが解脱、則ち無價の寶珠無價の纓絡を所持することになる、日蓮大聖人は吾人の儀表である深く心に銘せられよ、

ある所に、金持の隱居がありしが、この隱居は一代に資産を、作るほどありて、言行の一致は素より、道理に明るく、それに奇骨稜稜として、公共の事業には産を傾けても盡しました、若い時より、世の風潮と戰ふて、この間に人生の機

を實感したと見へて、屢屢一族の者に教訓を加へた、『世の人が、我等一族に尊敬を拂ふのは、金の光である、里は仁を以て美となすといふ、聖人の教に基き、資産を増殖と同時に、公益事業には、力を盡して盡して呉れ、昔より、大名に英敏の君、尠なく、金持に馬鹿息子の多い、これは追從輕薄に釣れ、義理に遠ざかり理解力を、失ふからである、資産家の任務は、金を有益に使用するにありと』この隱居の教訓は、その一家の風習となり、度度、官より善行の褒賞を、下されたが生者必滅の風は、この隱居の身にも染み、不圖した病氣のために、打臥たが、再び餘命なきを悟りし、隱居は、一族の者を集めて、重き枕を擡げて、いへるには、自分は一族の信切なる、介抱を深く悦ぶ、今度の病は命數の竭くるのである臨終の一念は多年の行業にありとの聖訓を、守り正念にして聖の靈化に依り成佛を願ふのみである、生前の事に就ても、沒後の事にも、思ひ殘すことはない、唯一つ一族の者に、賴み置は、遺骸を棺におさめるとき、双手を外へ出ておいて呉れ、これが何よりの追善であると、秋風々蕭として、庭の桐一葉落ち、群鴉梢に啼くの時、隱居は草頭一塵の露と消へた一族の者は、奇怪なる遺言であると、思ふたが、日頃、風變りの隱居のことなれば、これには、なにか意味ある事と信じて、その遺言の通にした……近郷近在の人々は、今日隱居の葬式といふので、陰ながらも、見送りをして、その生前の德行を感謝しようと、沿道は、人を以て埋まるほど雜踏したが、靈棺が來ると、隱居の兩手が出ておるから、人々は奇思の感に打れ、雜種の批評が始りた

甲「何んと皆さん、昔から灰ふきと金持は、溜れば溜るほど穢ないといふが、一代に仕揚て金の中に埋まりておる、隱居も資産に未練があると見へて、棺桶から双手を出ておる、あれでは、とても浮べない、

乙　隱居が、手を出しておるのは、欲の深い本性を暴露たてある、色々の噂を立ましたが、初七日の法要が濟て、隱居の部屋を掃除すると、何時認めて置たか、一通の書面が出た、この書面によりて、隱居が双手を出ておけとの、遺言の意味が解り、一族の者は、今更ながら、隱居の精神に感伏した、

「十善皇帝の樂みも、雛に咲ける樒花の如く、貧富貴賤の隔も今生の夢め、醒めて本覺の都に到なば、我等の如く人に知られし資産家も、津々浦々に漁る海士も、深山に樵る杣人も、皆佛の力法の力にすがるの外ない、迷途の旅人は、今生の隔なく御同様、無一物、無一物、……

これぞ、隱居が遺言の意味である、これぞ、資産家が實感したる解脱である、この資産家の解脱は、拜金崇拜や有財餓鬼を警むることになるのみならず、解脱は宗教の價値であることも、了解であらう、

前に引證したる、法華經の金言に基き、この經文を實感し

これによりて、解脱せられんには、人生の苦痛を除き、佛道を成就することが出來る、學問があり智慧がありても、正法を信ずることの、出來ない人は則ち、薄德の人になり、貧窮下賤の人になる、日蓮聖人は、榮花に心醉せる北條一門を、貧窮の人下賤の輩であると、申されたは、この經文に對照れたである、

富貴に淫せず、威武に屈せず、自己の確信を以てその本分を竭し、我れ身命を愛せず、但正義の犧牲になるべしとは、法華經主義である、日蓮聖人はこれを實感せられた、この法華經主義は永久不滅である、永久不滅の大光明である、

善惡の分解は、常識ある者は、識別の力がある、されど、惡業の因緣によりて、吾人の有する無價の良心は、忘想の闇のために、その功能を害ふことになる、これ、憶病なるがゆへである、憶病は決斷力の薄弱なるによる、これ解脱の出來ない人である、深く信心を採るべし、憶病にては契ふべからずとは、解脱の一日も早かれとの、日蓮大聖人の御慈悲であります、

發心は宗教入門の初步にして、解脱は成功である、庶幾わくば、世の人、顯本の正法に發心せられ、その本分を竭されんことを、吾人は、飛花落葉の狀を見て發心せる、二乘の人が自己の苦痛を逃れんことのみに焦慮して、救濟の信念なき行爲は、吾人がこの人生に對する、責任を無視せる者として排斥する、西行法師熊谷直實等の如き、發心して情欲を捨るを得たりとして、自他俱に安樂する道念なき者を、妄見の網の中にある、罪業の人と斷定いたします、無量義經に

「この經は、本諸佛の室宅の中より來り、去て一切衆生の發菩提心に到り、諸の菩薩所行の處に住すと」

これ則ち明かに、發心したうへは、菩薩所行の處に住すとありて、救濟の信念を抱き、責任ある行爲をせよとの、佛陀の御示なれば、これを領解せられんことを、皆樣に御勸めいたします、」

附言

業とは、佛教では所作といひます、芝居などに所作事といふことがあります、畢竟、行爲である、善業惡業、業感といふことがある、善業をすれば、よき結果を招き、わるい事をすればわるい結果になる、これを業感といふ解脱とは、さとりたるうへは、諸の苦惱を脱る則ち、成功の意味であります、」

聖訓

内外典の詮を承るに道理には過ず、されは天台釋して云く明者は其理を貴び暗者は其文を守る文、釋の心はあきらかなる者は理をたつとび、くらき者は文をまもると會せられ待り候（女人往生抄）

七、本尊　1　總要

(1)本尊に關する考察點

本多日生

本尊に就て公正なる考察を遂げ、清新なる信仰を定むることは、本宗教義上最要の大事なるのみならず、佛教の死活こゝに懸り、宗教の生命亦こゝに存す、哲學研究より進みて、求智の欲望を充たさんとする人の宗教觀と、佛教の觀念系に屬する、乾燥なる研究より來れる佛教觀とは、內外相應じて理論的解釋の下に、理性の滿足を得んとして、擾々たる學見を競ひ、曾て純善なる信仰を顧みざりしも、最近最新の研究に於てこの種の見解は未だ宗教の本質を熟知せざりし所論、佛教の妙致を体得せざりし所說として排斥せられ、こゝに宗教の本質は神人の交接に存し、佛教の妙致は感應道交に在ることの闡明せらるゝに至り、從來の研究とはその着眼を異にするもの、日に多きを加ふる樣になりました

私共は多少西洋の哲學をも研究し、又佛教の觀念系をも學びましたが、佛教徒が西洋哲學の理論に與みして無神論を主張し、自ら乾燥無味の教義に甘んずるの傾向あるを見て、心窃にその方針の誤れることを悲んで居りました、うれは自身の信仰を維持せられて居る思想の上よりも、亦我學びし本化の妙教に顧みましても、佛教の生命は決して迹門の實相論已下に存せざることを、深く心に感じて居りましたからであります、うの後宗義の研鑽を積むに隨ひ、愈この信念の誤らざるを確めまして、今日に於ては哲學者の求智の欲望と、觀念系の圓融の理談とは、遂に宗教の眞意を味識することの出來ないものと深く意識して居るのであります

若しも眞實の知見が開發されたならば、この宇宙法界には生物の恆存を認め、この生物には向上する者と向下する者とありて、即ち佛陀と衆生との關係を存し、こゝに感應の道在りて、一は救濟の爲め、一は煩悶の爲めに接合せんとするものたるを、否むことは出來まいと思ふ、之を否むことが出來て生物は一時的存在にして、佛陀も衆生も實存するものにあらずとせば、眞の宗教的信仰の生ずべきものにあらずと思ふ、因果の律法を信ずるも、圓融の妙理を信ずるも、法性の平等を信ずるも、これ等は皆迷悟苦樂の關係を認むるより來るものにして、若しも單に無苦無樂、無迷無悟の境界に安んずることを、理想するものあらば、こは人類思想の變調者にして決して正當なる吾人の欲求と云ふを得まいと思ふ、この方向に走るものは、元宗教心に驅られて發心したるものが、中途より煩瑣なる教義研究の爲に、知らず識らず宗教より隔離せられんとするのである、私の考では因果の律法を信ずることも、圓融の妙理を信ずることも、法性の平等を理想することも、皆宗教心を完成する一部の要素に過ぎないと思ふ、即

ち因果の律法を信ずる思想が正當に進めば、道德的信念となりて惡を誡め善を勸むることゝなり、而してその結果は苦と迷とを去つて、樂と悟とに到ることを信じ、こゝに佛陀の境界を渴仰するのである、又圓融の理法を信ずるのも、この妙理あるが故に、佛陀は無限の妙用を有し、救濟の神通を現じ吾人は轉迷開悟する時、本体に有せりし佛陀の本覺を顯發すと信ずるのである、又平等法性を理想するのも、我執妄見を斷破して絕大幽玄の思想を養ひ、我他彼此の邪見を蕩遣して如來平等の大智惠大慈悲に趣向せんとするのであつて この平等を憶想するが爲に、苦樂迷悟善惡邪正の道念を破壞すべき所由はないのである、煩惱即菩提と云ふが如きも、その圓融を認むるより、愈々益々菩提を翹望せしむるものであつて、煩惱の境界に安んせしめんとするものではない、顯即を談じて如法の修行を廢し、平等を聞いて生佛の關係を撥無するが如きは、全く觀念系の未成熟なる人師の誤解に過ぎない我大聖釋迦文の敎は決してそのような邪見顚倒を勸むるものではありません

元來佛敎に於ては信念を離れたる智行を認めない、又智行の完成する時は必ず大信仰を煥發するものであります、大論に信を能入とし智を能度とすと說かれたるは、この意である、又智を能度とするからと云つても、最後の行法は矢張信に由らなければならぬ、故に法華經に智慧第一の舍利弗の成佛に就て、佛陀は信を以て入ることを得たり己が智分にあらずと誡告し給ひたのであります、信なくしては佛敎最初の門に入るを得ず、信なくしては佛敎最後の證を得ることが出來ないのであります、この大綱格を忘れて、理論裡に沒頭し、求智の欲に迷ふ人は、決して佛敎の眞意も体得することは出來ません

要するに信智の關係を顚倒し若しくは混亂するが爲に、佛敎の眞意を体得せざりしは、佛敎史の大部分を占めたる通弊であります、本化の門下生に於ても、之と同一の謬誤を繰返せるものが多いように思はれるのである、故に佛敎の眞意を得んとするにも、本化の妙旨を体らんとするにも、この信智の關係を尤も鮮明に會得せねばなりません

この信智の關係が會得せられたならば、次に佛敎徒の本領は歸依三寶に存し、我宗の本尊亦本門の三寶を奉安せるものたることを領知すべきである、この三寶式の敎義に依りて、彼の法佛の爭論其他本尊上の紛議の大部分は、解決せらるゝのであります、次に本佛三輪の妙化を會得して、信仰の歸趣を確定することが、尤も大切であります、次に本尊に關する餘論を解決すること、この餘論の中には、木畫の本尊と文字式の本尊との調和、年數前後の爭論の調和、雜亂勸請を否認する所以と、其回護說の辯駁とを含むのであります

已上の信智の關係と、三寶式と、三輪の妙化と、餘論との四

綱目に就て、順次私の所見を述べる考であります、この四綱目の敎義が鮮明に解決せられたならば、こゝに始めて本尊に關する公正なる考察が完成せらるゝと思ふ

(2) 信智の關係

元來佛敎の行門に二種ありて存せり、即ち信行法行なり、この名は三藏敎の七聖の位の初に見道の人と稱するがある、見道とは眞諦の理を見て無漏の智を發する道行なり、この見道の人に二種あり、即ち隨信行隨法行と稱するのである、

婆娑論(五十四卷五十六丁)に曰く

信行の種類とは本より以來、性に信多きが故に、若し他の汝農を務めて以て自ら存活すべしと勸むるを聞いては、彼れ思察せず、聞き已つて便ち作す、餘事も亦爾なり、法行の種類とは本より已來、性に慧多きが故に、若し他の、汝農を務めて以て自ら存活すべしと勸むるを聞いては、彼れ便ち思察す、我れ作すべしとやせん作すべからずとやせん等と、審に思察し已つて、然して後に之を作す(略鈔)と

この文に依れば信行法行の意義明了なりと思ふ、猶妙玄四に曰く、

隨信行とは鈍根見道に入るの名なり、自の智力にあらず他に憑つて解を生ず。隨法行とは利根見道に入るの名なり、自らの智力を以て理を見結を斷ずと

隨信行は自の智力にあらず他に憑り、隨法行は自の智力を以て理を見ると云ふ、この釋二行の性質を示すこと愈分明である、而してこの二行は三藏敎にその端を開いて、後本門の行法に至るまで存して居るのである、されば佛滅後の各宗に於て行法を立つるにも、この二種の何れかに依憑せざるものはない、又三藏敎の七賢の位の初の三賢の第一、五停心の行人を見るに、數息、不淨、慈悲、因緣の四は一定すれども、第五の停心に於ては、一は界方便を觀ず、即ち地水火風空識の六大は元空なり、人身はこの六大より成るが故に亦空なり、何の執する所あらんと觀ずるのであるが、他はこの界方便を除いて念佛停心を加ふるのである念佛停心とは佛の六根六境六識の功德を念じて、迷忘の貪愛を起さざるを云ふ、斯くの如く一は界方便を觀ずる智慧を取り、他は佛の功德を念ずる信仰を取るのである、是れ大に注目すべきことゝ思ふ

又龍樹の毘婆娑論の易行品に、觀慧を陸路の步行の難きに、念佛を水道の乘船の易きに譬へたるは、亦二種の行門を說示するものであつて、後世この念佛を狹義に解して、而かも顚倒せる彌陀專念の主意に附會したるは、許すべきにあらざれども、該論の主意の如くに廣く諸佛を念するの義を存して、之を法華の統一的本佛論の上に移して、本佛釋尊の功德を渴仰せしむるものとすれば、何等の支障あるを見ず、又法華經の分別功德品隨喜功德品に亘りて說かれたる所は、正しく信

行法行の關係を示し給ふものである、本經を精讀するに、隨喜位、讀誦位、說法位、兼行六度位、正行六度位の五品の行人に就て、初の隨喜の行人を標出して、其の功德を挍量すること至れり盡せり

阿逸多汝且く是を觀よ、一人を勸めて往いて法を聽かしむる功德此の如し、何に況んや一心に聽き、說き、讀誦し、而も大乘に於て人の爲に分別し、說の如く修行せんをやと

之を文句に釋して曰く、往いて法を聽かしむるは隨喜の外の五十人にして、即ち名字即の無解のもの、說を聽きては初隨喜品、讀誦とは第二品、而も大乘に於て人の爲に分別しとは第三品、如說修行は第四品にして第五品を兼ねたりと、日蓮上人の聖判は如何に

八十萬億劫の間、檀戒忍進念佛三昧等、先の五波羅密の功德を以て、法華經の一念信解の功德に比するに、一念信解の功德は、念佛三昧等の先の五波羅密に勝るゝこと百千萬億倍なり、難易勝劣と云ひ、行淺功深と云ひ、觀經等の念佛三昧を法華經に比するに、難行中の極難行、勝劣中の極劣なりと

聖祖行門上の着眼はこの文に在りて之を窺ふに難からず、即ち法華の信行を以て最勝にして而も最易の妙行と判じ給ふのである、又文句に隨喜の二字を釋すらく

隨とは事理に隨順ずるなり、理に順ずとは佛の本地深遠深遠なるを聞いて、信順して一毫の疑滯なし。事に順ずとは佛の三世の益物該亘して一切處に遍するを聞いて、亦一毫の疑滯なし、廣事に即して而も深理に達し、深理に即して而も廣事に達す、乃至我れ及び人を慶べば凡夫の心を以て佛の所知に等ふし、所生の眼を用つて如來の見に同ず、此の如き知見は法界を究竟し、廣ふして涯底無し、無等無等等にして更に過上なしと

この釋は隨喜の信仰を以て、直に觀智に代はる妙德ある所以を說明するものにして、やがて後代聖祖の大信仰中に、小なる觀念と信仰とを悉く攝取し、有智無智一同に信念成佛すとの、大敎義開發の一素地をなすものと思ふ智者大師が妙法を釋するに、衆生法佛法心法の三法妙を以てし、而して但し衆生法は太だ廣く、佛法は太だ高し、初學に於て難となす、然るに心佛及衆生はこの三無差別なれば、但自ら己心を觀ずるときんば、則ち易となすと斷定し給ふて、己心觀の智行を取りたるは、時機の爾らしむる所なるべけれども、佛法妙を太だ高しとして之を難となすは、自己の智力に依りて佛陀の妙智に接せんとするが爲てあつて、若しも信仰に依りて佛陀の智悲一体の慈悲に接合し、以てその功德を受得せんとするならば、何の難きことか之れあらん、やがて聖祖の如く最勝にして而も最易の大信行を立つるを得たりしならんに、彼が智を以て佛に接せんとするの思想は、遂に己心觀を以て三法中

の易行なりと斷定せしむるに至つたのである

佛敎々理史を通覽致しますれば、法行系は法界觀人身觀の上に諸種の見解を出しまして、三藏の拆空、通敎の体空、別敎の單中、圓敎の不單中となり、或は三論の八不中道觀、法相の唯識觀、華嚴の唯心法界觀、眞言の五輪觀、天台の實相觀等と成つて、闡菊研を競ひ、又信行觀は佛陀の信仰、敎法の信仰、僧寶の信仰等、三寶の上に諸種の見解を生じまして三藏の劣應身佛、通敎の勝應身佛、別敎の報身佛、圓敎の法身佛となり、或は華嚴の盧舍那、眞言の毘盧遮那、淨土の阿彌陀となり、又眞言の阿字、淨土の名號等となり、又觀音の崇拜、頻頭盧の崇拜等、散漫たる信仰の對象を立つるに至りましたが、要するに三寶を尊信する思想の混淆錯亂に外ならぬのであります

斯の如くに佛敎の行門は、法行の法界觀人身觀と、信行の三寶崇拜との上に、紛々擾々の觀を呈しましたが、我聖祖出づるに及んで、この紛亂を一掃すべく發心し給ふて、先づ觀念の整理と信仰の調整とを計り、而して一箇の大信仰中にこの觀念と信仰とを攝收して、佛敎行門の大解決を示し給ふたのであります

觀念の整理に就ては、彼の拆空体空單中不單中の諸觀を、天台の圓融三諦の妙觀の上に攝收することゝ、又彼の八不中道唯識唯心法界五輪等の諸觀を、天台の一念三千の妙觀の上に統合せること、を認め給ふて居る

十如是抄（内二八）に曰く、斯くの如く多くの法門となりて八萬寶藏と云はるれども、すべて只一の三諦の法にして、三諦より外には法門なき事なり、其故は百界と云へば假諦なり、千如と云へば空諦なり、三千と云ふは中諦なり、空と假と中とを三諦といふ事なれば、百界千如三千世間まで、多くの法門と成りたりと云へども、唯一の三諦にてある事なり

開目抄（内三）に曰く、又佛に成る道は華嚴の唯心法界三論の八不、法相の唯識、眞言の五輪觀等も、實には叶ふべしともみへず、但天台の一念三千こそ佛になる道とみゆれとこの外觀心本尊抄の初數紙に亘りて示されたる處は、天台の觀念を以て從來の觀念系を整理し給ふのである、又信行の調整に就ては、佛寶を壽量顯本の本佛に於て、三世十方の諸佛を統總し、法寶を妙法蓮華經の五字に於て、諸種神咒等を總合し、僧寶を本化の大菩薩に依りて、諸菩薩羅漢等を從屬せしめ、斯くて信行系に屬する紛亂たる信仰の對象を、唯一本尊の上に統攝し給ふたのである

この本門の大本尊に信行系を統攝し給ふは、見易き所であつて、多辨を要せぬことなるが、先の整理したる天台の觀念をも、この大本尊の信仰中に統攝せらるゝことを、特に會得せねばならぬ

觀心本尊抄はたしかにこの觀念を大信仰の中に攝め給ふ御趣意であります、即ち私に會通を加ふれば本文を贖すが如しと雖もと謙して、妙法五字を受持信念する上に釋尊の大功德を受得して成佛すべきを說き給ふは、前來述べ來れる天台の觀念を、受持信仰中に攝取するのであります、立正觀抄の天台の觀念を因行と貶して、妙法の信仰を稱揚する所、四信五品抄の一念信解と初隨喜とを讃歎する所等、皆この意ならざるはなしと思ふ、特に一念三千法門抄の中に示すらく

一念三千の觀念も、一心三觀の觀法も、妙法蓮華經の五字に納れり

經の題目を唱ふると觀念と、一なる事心得がたしと、愚痴の人は思ひ給ふべしと

聖祖の所謂愚痴の人、却て門下生に多きは、奇なる現象と云はねばならぬ、又草木成佛抄に明さく

一念三千の法門を ふりすゝぎたてたる大曼陀羅なり、當世の習ひそこないの學者、ゆめにもしらざる法門なりと

嗚呼何ゞ習ひそこないの學者の、今鵝跡を絕たざるや思ふに法行信 行の二門は、佛敎々理上に於て、古今に蟠屈せる一大難問題なるが爲めか、されど聖祖一たび出でゝ、斯くの如くに觀念系を整理し、信行系を調整し、而してこの兩系を統攝して、唯一の大本尊の下に、信智一体の大信仰を敎へ、有智無智共に濟拔し給ふに遇へば、復何を苦んでか、二行混亂の痴態を繰返さんや、吾人は大聖の勸めに順ひ、農をなして生活すべしとならば、農を作し、商をなして生活すべしとならば、商を作すべく、農にあらず商にあらざる底の愚は、斷然悔ひ改めねばなるまいと思ふ

（次續）

聖語

我今大乘方等經典甚深の妙義に依つて佛に歸依し法に歸依し僧に歸依すと、是の如く三たび說け

華を散じて一切の諸佛菩薩と大乘方等經典とを供養し而も是の言をなせ、我今日に於て菩提心を發しつ、此功德を以て普く一切を度せんと、是の語を作し已つて復更に一切の諸佛及ひ諸菩薩を頂禮して方等の義を思へ（結經）

問ふて云く天台傳敎の弘通し給はざる正法ありや、答へて云くあり、求めて云く何物乎、答へて云く三あり末法のために佛留め置き給ひ迦葉阿難尊馬鳴龍樹等天台傳敎等の弘通せさせ給はざる正法なり、求めて云く其形貌如何、答へて云く一には日本乃至一閻浮提一同に本門の敎主釋尊を本尊とすべし、所謂寶塔の中に釋迦多寶、外の諸佛並に上行等の四菩薩脇士となるべし、二には本門の戒檀、三には日本乃至漢土月氏一閻浮提に人ごとに有智無智をきらはず、一同に他事をすて、南無妙法蓮華經と唱ふべし（報恩抄）

十二、訓育

施無畏

山根顯道

紊れに亂れた今の世の狀態を、佛陀懸鐵の明鏡に照して見ると、五濁の惡世（法華經方便品）と說かれ、恐畏の世（同寶塔品）と示されてあるが、疑ひもなく濁濁極まる惡世である、活馬の眼をも拔き兼ねまじき恐畏の浮世である、

戰爭には勝つた、世界の日本に成つた、東洋の君子國だ、文明だ、何だ蚊だと、表面ばかりは成程立派に力んで居るものゝ、なんの一皮めくつて其內面をのぞいて觀たら、それはそれは驚き桃の木柿の核でもうかとは捨てぬ貪欲……瞋恚……愚癡……三毒の煩惱は日增しに其勢威を逞ふして、どんな變情のよい間柄でもが、一朝利慾の問題に些の衝突が起るが最後、隔心が涌く不平が起る、それが嬲ては猜疑となり、嫉妬となり、憎惡とまで變化して、果ては決鬪も仕兼ねまじく、所謂喧嘩口論は宵の口の沙汰で、掠奪呑噬隨分と身命を賭してまで我慾を檀にする、如何さま動物性の發達せる此の世の中、他人は三年喰はんと居ても、自分さへ禍々なら何の痛痒も糸瓜もあつたものかは、狡猾い者はヅン〳〵榮ゑて高い地位に大威張をきめ込み、義理の人情のと云ふてゐる好人物をば、頭の上から蹈み敷いて呵々と心地よけに笑つて居る、而もそれが奸智の眼を輝かし、邪慳の角を生し、憤怒の髮を逆立てゝ、妄語の舌、貪慾の牙、恰かも餓ゑたる狼の如く、瞋恚の焰を虹の如く吐いて、いて世の中の弱蟲共を片端から打拉いて、我意押通さんずと急りに急る外道の容躰……自分は外道と論斷するが差閊はなからう、て、要するに外道でも惡魔でも强ひ者が此世の紳士だ、人道がどうの德義が斯うのと云つた處が、力がなければ食はず飲まず蒼くなつた揚句の極が、此外道輩に血を啜られ脂を搾られて、死ぬより外に仕方はないのだ、それが唯社會の一部のみではない、上は廟堂の諸公より下は其日暮の車夫馬丁に至るまで、政事家……實業家……敎育家……宗敎家のすべてが、此潮流に押し流され捲り立られつゝあるのだ、

實に濁れる惡世、恐畏の浮世……いくら最負目に見ても辨護の地位に立つても、よもや今の世を濟めりとは云ひ得られまい、立波とも云ひ得られまい、『上下交も理を爭ふて國危し』と、若も此狀態を幾十年も繼續したならば、それこそ此日本は乾度支那の二の舞を演ずるのだ、苟くも慨世の心あるもの、沿々たる此濁流に處して、何等か濟世の志念を動かさずには居られぬてはないか、

それから又、世に自已の壽命の脆さを知らむ者は無い筈だが悲しい事には三毒煩惱の烏鵲桶にのめり込んで、慾に眼の眩んだ我利々々旨者共ばかりだから、自分で自分の料理が就か

ないで、死の問題だの靈の問題だのは、からきし高閣に揚げて仕舞て、唯もう日夜營々として肉慾の奴隷に甘んじて居るだが併しいくら慾の皮の突張て居るものでも、壽命の慾を貫徹いて百年も二百年も押通しに息災では居られないので、是は斯うしたい、彼はあゝしたいと、計畫事業を雙の肩に荷い切れない程目論んで居ても、一朝死の黑幕が落ちるが最後、頭陀袋に六文錢の單獨旅行……げに如水沫泡烟と捉てられた金口の聖判、お互人間の狀態は、心を靜めて考へれば考へるほど、果敢ない、情けない、味氣ない、何とも早や心細ひ……濁濁の世、恐畏の世、加之誰もが生れ落ちにと早く既に、死の運命に片手を引張られて居る身の上、是は一つ篤と考へなければなるまい、

が、叶はぬとか駄目とか云ふことは、それは意志の弱い人の言ひ草で、弱音は罪祖の禁物である、『日蓮の門徒は臆病にては叶ふべからず』と示され、『たとひ乞食にはなるとも法華經に瑕をつけ給ふべからず』と敎へられたる、我等日蓮上人の御門下、所詮は釋迦に提婆太子に守屋は定の事で、正と邪と善と惡とは何日も睨み並のものだから、戰ふべし戰ふべし、大に戰ふべし、勇氣を奮つて正義の旗下に堂々の戰列を布くべきである、なんの亂れたる世にしろ、恐畏の世にしろ、正義は最後の勝利者だもの、顧慮ことはない、法華經を信ずるものは畢生浮世の舞臺に戰鬪を繼續すべく覺悟をきめたら、それで宜いのである、

とは云へ、虛威張は無論駄目だ、猪武者では末はとげられない、さらば戰鬪準備は如何と云ふ事に成て來るが、それよ其一段に成たからには、何處迄も心を强むべく、決心の臍を堅むべく、如來誠諦の金言を紹介しやう、

それは外でもない、經に『施無畏者』(同普門品)と說かれてあるそれだ、『無畏』とは委くは無所畏とあつて、大丈夫恐畏るゝ所なしと云ふ意味である、その恐るゝ所なき大丈夫の强固なる道念を、『施』と云ふて我等に施し與へて下さる方があるのだ、それはそもどんなれ方かと云ふと、壽量品に實在常住と詔せられた、久遠實成大恩敎主釋迦牟尼世尊の御事である自我偈に『救諸苦患者』と說せられたのは即ちそれである、さては此世尊にお縋り申して、世尊の加被の下に我等一生の云爲行動をなしたならば、世諺に云ふ親舩に乘た心地で、いくら浮世の波が荒れやうが、惡魔の颶風に遭遇さうが、それこそ大丈夫貧乏動ぎもしないのである、

處が、此處が是非一つ談となければならん事は、其の『施無畏者』と云ふ四字に就て、無畏を施して下さる方を觀世音菩薩とのみ思ひ做して居るものが多ひ、是れは由々敷大事の義門で、充分研究の價直ある宗學上の問題なのである、

成程、一應經文を素讀にした分では、題號からが觀世音菩薩普門品とあつて、專ら觀音菩薩普門示現の力用を紹介した品

の樣に考へられる、隨てその菩薩の力用を說くに三十三身を列擧して、

若し衆生あつて婬欲多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば、便ち欲を離るゝことを得ん、
若し瞋恚多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば、便ち瞋を離るゝことを得ん、
若し愚痴多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば、便ち癡を離るゝことを得ん、
若し女人あつて設ひ男子を求めんと欲し、觀世音菩薩を禮拜し供養せば、便ち福德智慧の男子を生まん、
設ひ女子を求めんと欲せば、便ち端正有相の女の宿し德本を植へて衆人に愛敬せらるゝを生まん、

なぞと何でも御座れ汝等凡夫の願望をば、念彼觀音力の信行者には悉く以て叶へてやる、浮世の波にさらげ出されて恃怙少ない者共へは、來れよさらば救はんとの誓言、如何にも頼もしく、南無大慈大悲の觀世音菩薩と、自然に頭の低る樣な心地のするのは、一應無理のない話で、さればこそ三十三身を表示して西國三十三ヶ所の札所とたゝへ、今猶ほ多くの信男信女を牽引する多大の勢力をもつて居るので、凡そ佛敎各宗の本尊の中に、此菩薩ほど人氣のよいお方は又とない、天台、眞言、禪、淨土、何の宗旨でもあれ、此菩薩だけは特別待遇として、愛敬したゝる賽錢箱となつて居る、のみならず比日一向音沙汰がないが、一時大道長安と云ふ僧侶は、救世敎と云ふ一派を開かんず力瘤を入れて、救世觀世音菩薩と吹き立てた程だ、斯樣に此菩薩は手もなく迷信の親玉に擔ぎ上げられて居らしやるので、擔ぐ方にはいろ〳〵慾得づくの魂膽もあらうが、擔がれた觀音そのもの、御迷惑は、何とも實に察しやられるのである、

地躰が觀音に對して、奇う云う誤謬の想の浮くのは、畢竟宗學の素養なく敎義の研究が足らざるより起る僻見であつて、第一法華經そのものゝ佛敎經典に於ける位置と云ふ事から調べて掛つて、その一經首尾の統一主義たること開顯主義たることが、少しでも領會が出來たならば、そんな妄想の浮ふべきを等は斷じてないのである、が、今はそんな方面から說たては談話が餘りに專門的に成て、一般の人には判り難からうから、手取早く普門品そのものに就て說明する事にしやう、

普門品は『妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五』とあつて、無論法華經の序正流通の三段の中には流通段である、流通とは元來正宗の實義を宣流助顯すべき筈であつて、此品の法華經中にあるのは、要するに正宗段壽量品の大敎義たる本佛本法を流通すべく說かれたのである、此大綱が呑込めた以上は本佛釋尊の救濟力と肩を比ぶるが如き觀音の救濟力を、今更此品で認め得べきものでは斷じてない、然らば何故に三十三身普門示現の力用を列擧して、觀音妙智の力を說示したかと

云ふに、それは疑もなく況顯と云ふ格から來て居るのである況顯とは、或ものを示してそれに比較して、更により偉大なる或ものを知らしむると云ふ說明法である、則ち因位の分齊たる觀音すら猶ほ且つ此の如き力用あり、況んや果分救濟の本主たる本佛釋尊に於てをやと云ふ說明法である、譬へば日本の軍人は一騎當千て、ただの一兵卒でも敵國の百人千人に當る勇氣と膽力とを持て居る、況んや士官將校をや、況んや恐れ多くも　大元帥陛下に於てをやと云ふが如き條理のものである、

さればこそ、普門品長行の末段に、無盡意菩薩が佛に白しあげるには、世尊我れ今ま當に觀世音菩薩を供養すべしと云ふので、即ち頸にかけたる價直百千兩もする處の七寶の瓔珞を恭しく捧げ持ちて觀音に供養し、仁者此の法施の瓔珞を受け給へとあつた、處が觀世音は肯て之を受けずと斥けた、何故かなれば、自分はその樣な莫大の供養を受くべき資格が未だないからとてある、無盡意菩薩また觀世音に向つて、仁者我等を憐れむ御了見でどうぞや受け給へと重ねて請求した、その時に始めて佛陀の梵音がかゝつて、觀世音よ貴樣何も遠慮はないからその瓔珞の供養を受けよと仰せられ、茲に觀世音も佛の允許を聽て漸くのこと安堵してその供養を受けた、さて受けることは受けたが併し、それをば我ものと仕舞ひ込くことは身分を顧みて仕得なかつた、即ち受くると同時に、分つて二分となし、一分は釋迦牟尼佛に奉り、一分は多寶佛塔に奉るとある、普門品の現文を見て此一段に氣がつかないのは餘程どうかしてるので、現文を率直に拜讀したならば、成程と合點が行くべき筈のものである、此現文より推して考へれば、若しも觀音に手を合せて救濟を求むるものありとしても、觀音そのものはイヤ貴公達が自分をそんなに賴むのは考へ違ひだ、自分は全く以てそんな力用があるのではない、よし有たにしてからが、釋迦佛の御領内に巾をきかせべき道理がない、何にしろ自分は眞平御免を蒙る、貴公達はそんな横道に這入らないで、直接に本佛釋迦牟尼世尊に純潔なる信仰を捧げて、最後の救濟をお願ひしなさい、と斯う云てこんな處に長居は無用と尻に帆かけて、所謂尻喰ひ觀音をきめ込むに違いないのである、

以上普門品の誤解は略ぼ說明したから、眞實の『施無畏者』は本佛釋尊たること、今は了解が出來たであらう、尙ほ無畏の類文を調べて見ると、方便品提婆品等その他數ヶ所にあるが何れも皆本佛釋尊の力用を稱げたもので、篤學の諸君は委悉にお調べなさると、一段の妙味が會得せられることとてある、て、此無畏を施し賜はる處の佛陀の慈悲と、その無畏を受得する我等凡夫とは、信念の上に感應道交哀愍救護の發作あることも定の事て、かくて我等は此大慈大悲の佛陀護念の下に無畏の境界に安住して自己の立脚定まり、此立脚定りて徐ろ

に溷濁の潮流と戰ふべく、戰鬪準備は巨細の點にまで行屆くのである、經に『當著忍辱鎧』(勸持品)と說かれたのも、正しくは此無畏を獲得すべく敎へられた同工異曲の文字てある、終に臨んで一言斷つて置き度のは、戰鬪と云ひ戰ふべしと云ふたのは、それは霧暗矢鱈に爭鬪を聳慂して、喧嘩腰になれとては決してない、浮世の荒波に閉口垂れぬ樣、何處迄も勇猛の志念に住して、法華經的見地より、少なくとも時代の弊風を矯正すべく、處世の大決心を促したのである、「ミーラ」取りが「ミーラ」にならぬ樣大々的決心を促したのである、其意氣は宛かも軍人の戰地に在るが如く、常恆不斷に、佛祖を頭に戴いて、萬事佛祖の加被の下に左右するの精神でなくては駄目なのてある、戰鬪と云ふ語はちと耳障りになる樣だがなんの古往今來煩惱の敵と戰つて〳〵勝ち果せたのが、それが即ち成佛なのだから、なにも氣に障へることは毫もない、所詮紊れに亂れ荒れに荒れつゝある、此激浪怒濤の世の溷濁海中に掉して、泰然自若として正義の凱歌を揚げる、それは無畏の大決心の進れる、百鍊、鐵の如き日蓮門下の仕事てあるのだ、さればよ、結尾として茲に聖祖門下の僧俗が、この信念安住の下に溷濁の浮世に處すべき敎訓の一節を紹介しやう、

法華宗の四條金吾四條金吾と鎌倉中の上下萬民乃至日本國の一切衆生の口にうたはれ給へ(語七六一)

敎學財團設立に就て　(其二)

釋天順

世の宗敎家が、或は慈善の名に於て、或は堂塔營繕の名に於て、寄附金を募集し、其目的に向て進行しつゝあるとは聞いて居るが、今回の如き純宗敎的目的に向て勸募する事は稀てある、從て在家の人々も餘り聞なれぬ事故、異樣の感をもつて居るものもないとは限らない、因て前者の目的よりも、格段の利益ある事を說明し、此淨業の成効に資する事と致しませう

慈善とは御承知の如く、貧民の救助や、孤兒の養育の如き、要するに獨立生活の困難なるものを救助するとてあるから、至極結構なとてある、佛心とは大慈悲心是なり、と佛も抑せられてあるから、慈善の行動も、佛心の活動に相違ないが、慈悲にも本末輕重と云ふ事がある、一切衆生の苦痛は生死流轉が根本てあつて、此生死の苦界を解脫せしむるが、慈悲の本源てある、此の慈悲と世間の慈善と比較致せば、一方は一時的てあつて、一方は永久的てある、一方は部分的であつて一方は全体的てある、前者は枝葉的てあつて、後者は根本的てある、聖祖は先づ臨終の事を習ふて後に他事を習ふべし、と仰せられてある、臨終の事を習ふとは、生死解脫を全ふする安心を云ふのてある、他事を習ふべしとは、生活問題の必

須條件を云ふのである、されば區々たる慈善問題に熱中するに先だつて、人生の根本問題を解決すべき機關たる、教學財團に盡力するが刻下の急務であつて、其功德も廣大であると思ふ

又堂塔伽らんの營繕の如きも、本尊を安置し、修行をする道場である、特に信は莊嚴より起ると云ふ格言もあるから、營繕の事は、極めて必要に相違ないが、然し莊嚴は信仰の影なりと云ふとも知らねばならぬ事である、信仰てふ主觀的作用あれば、其反射作用として莊嚴と云へる現象を表はすべきが必然の關係である、故に誠の莊嚴は眞の信仰より發射する事である、信仰なきの莊嚴は、品格なき人の盛裝せると一般、何等の尊敬をも起らんのである、又本尊は如何に神聖であつても、此本尊を紹介するの僧侶が、宗教の本義を辨へて居なかつたら、正しき信仰を得ることが出來ない譯である、よしんば堂塔伽藍はなくとも、本佛の使命を自覺せる僧侶があつたならば、人類を救濟することが出來るのみならず、從て堂塔伽藍の建築及び營繕の如きは不求自得である神力品の若於園中若於林中云々の聖語を拜見すれば、直ちに領解する事が出來るのである、殊に堂塔の如き、一朝烏有に歸した場合には、十年の苦辛も一片の烟と化し去る譯である、之に反して、本財團に於ては、其基金の確實なるのみならず、其目的は本佛の使徒を養成し、本佛の使命を宣傳し、更に進んで堂塔の維持をも含む譯なれば、慈善事業や堂塔營繕のそれ以上に、純宗教的活動をなす譯である、斯くの如き譯であるから、出家在家俱に空前の勢を以て、盡力せらるゝ事は、當然の次第である、力を勞するものは、人に治められ、心を勞するものは人に養はると云ふことがある、僧侶は道の爲に心を勞して、在家に養はれ、在家は生存問題に力を勞するが故に僧侶に教へられるのである、因て僧侶は自己の教化せる在家に向て、本財團の設立が如何に多大の光輝を放つべきかを皷吹し、出來得る限り遊說するが當然の任務である、さりとて在家の生活の狀態をも顧みず、其地へ難きを强ふるが如きは、斷じて愼まねばならぬ事である、僧侶の寄附を受くる、或は淨財と云ひ、或は喜捨と云ふ、要するに在家の人の喜んで、應諾すべき最高額を以て限度とせねばならぬ事である、否之れは在家の人の覺悟であつて、僧侶としては今回の事業を完全に說明し、在家の進んで來るのを待つべきである

元來現今寺院の財政の程度が、宗門を經營し、本佛の使命を果すべき實力ありとすれば、本財團の如きものを設立するの必要はないのである、けれども現今の狀態到底理想通りに遂行することが出來ないのである、然らば之れが爲に直接損害を被るものは、僧侶であるかと云ふに、決してそうではない、僧侶は寧ろ間接であつて、直接の被害者は在家である、僧侶は料理を調進する料理番の如く、在家は其料理を食する客人の如くである、其料理にして滋養分を缺き、不消化の品物であつたら、腸胃は痛めるものは必ず客人である、其如く僧侶道を解せず、半可通にして法を說かば、信仰の腸胃を害するものは、必ず在家の人である、腸胃を害する事を厭はゞ、料理番を改正するの必要あるが如く、信仰の健全を祈らば、完全なる僧侶を養成すべき必要がある、僧侶は在家の人の爲めに必要を感ずるのである、されば在家の人は、僧侶の爲めと云ふ考へを捨てゝ、直ちに自己の運命を決すべき大問題であると云ふ覺悟を要するのである、僧侶の價値の影響は、啻に信仰問題に關するばかりでなく、政治教育風教其他百般の問題に至大の關係をもつて居るのである、故に本財團の事に就て、僧侶の盡力すべきは申す迄もなきことなるが、在家の人が異體同心以て一切の冗費を省き、勤儉貯蓄を心掛け、檀波羅密の淨業を致される樣希望に堪へざる次第である、聖訓に言く「設ヒ正法ヲ持ツル智者アリトモ檀那ナクンバイカデカ弘

マルベキ」

總本山妙滿寺に參拜して

周防　窪田利兵衛

諸天擊天鼓常作衆伎樂
ちゝ母の影こそみねね手ひけして
天のすゝみの聲をきくかな

兩曼陀羅華散佛及大衆
さきの世の驚のみ山はしらねども
法の華ふる山は斯の山

日什上人置文諷誦章卷上

齡八十二老比丘　阪本日桓講述

其二十三

開遠本者顯三身一身之自受用也應用堅高三世利益橫徧十方　此の四句廿六字は法華經本門の絕待妙に約して開迹顯本したる文て有ます上の二句十四字は顯本を明し下の二句十二字は開迹を明したる文て有ます是れより本文を消釋して聽せませう偖て開遠本と申す語は餘り耳にきゝ馴れぬ辭て常には開迹と申し開近と云ふは耳なれてをります然るに此の諷誦章に開遠と熟字したるは開祖の杜撰の造語であるかと疑がはるゝ邊も有りますけれども左よふては有りません天台の法華玄義七の卷丁四十發本顯迹說佛壽長遠觀佛三昧大得增長文此の玄義の文に依憑して開遠本と御書になつたて有ります深く今の諷誦章の御講談を吟味して見ますれば誦文の上の二句十四字は玄文の發本の二字に依て御書になり下の二句十二字は玄文の顯迹の二字に憑て御書になつたて有りませう此の誦文の上の二句の文の意は伽耶城を去ること遠からずして三菩提を得たる今の釋迦の佛体を開顯して見れば全く今日新成妙覺の釋迦にはあらず久遠五百塵點劫の往昔本因本果實修實證したる、三身即一身の自受用自行

内證の遠本の佛なりと云ふ文の意なり下の二句の文の意は垂迹應用の釋迦は堅に約して論ずれば三世九世世々番々に高く衆生を利益し横に約して論ずれば十方法界に廣く徧周して衆生を濟度したる不可思議の大功德を傳へたる佛なりと云ふ文の意なり其所て前て辨したる開遠本者の一句に就て更に辯じますれば開近顯遠と云と釋の文と開迹顯本と云ふ釋の文を約略して開遠本者と本書になつたて有ます又た此の開近顯遠と開迹顯本と二句の語に就ては文便と義便との二の所以があつて此の二名が成立た者て有ます文便とは經文に有る文字の便と云ふ事にて是れに約すれば開近顯遠と書きたる方が宜し復た義便には釋尊の御身の上にて本佛と迹佛と二佛身を講義するには開迹顯本と書きたる方が宜しき事で此の文便義便の事は上みに於て委く辯したる故に略します其所て此の諷誦章の開遠本者の一句四字は文便と義便と二の法相を兼含して御書になつた御文章にて只管感伏と云ふより外はありません

次上行等之四導師者最初實成之弟子久遠證得之菩薩結要傳受之大士末法弘經之導師也 文此の五句三十八字は弟子門に約して本化の四大士を歎釋したる文て有ます此の五句分て三段て初の一句九字は標文次の三句廿一字は正しく釋す末の一句七字は結釋の文て有ます偖て本化涌出の大士は獨り上行等の四大士のみにはあらす本經に御說きになりました大士方は其數無量恒河沙不可思議なので有ます然るに別して四大士を擧げたるは釋尊上足の嫡弟にて此の四大士を擧て餘の無量不可思議の諸大士を攝收したるて有ます偖て此の大曼荼羅の中には文殊普賢等の迹化高德の菩薩を列ねて有ますが此高德の文殊等には隻言半句の稱贊の語もなく單に上行等の四大士を讃歎稱美して釋したるは此の大曼荼羅は正しく法華經本門の本尊を顯示したるが故て有ます此の本化涌出の諸大士には上中下の三品の大士が有ます上品は上行等の四大士で中品は六萬恒沙の大士で下品は五萬己下の大士て有ます猶又此の四大士の名義を辯じますれは上行と命名したるは空假二邊の九界生死を超出し中道第一義天の佛界に上行したるが故なり次に無邊行とは竪に三世に高く横に十方に廣く行化無邊際なるが故なり次に淨行とは三惑の垢累を除き眞淨の妙法を修行したるが故なり次に安立行とは自行內證を成就して身心安穩なれば安と云ふ復た化他外用の行を立るが故に立と云ふ自行化他並ひ行するが故に行と云ふ是れは之れ三大士の名目に就て單に一德を擧て其名義を辨したるのみ此の四大士は萬善萬德兼備の大菩薩なれば名義の辨に泥むべからず次に四導師とは四は數を擧げ導は引導なり師とは敎師なり此の四大士は法華經本門壽量品の三大秘法の妙法を弘めて順逆二緣の衆生を佛界へ引導したる敎師なれば四導師と申すて有ます最初實成之弟子文此の一句七字は上行等の四大士は釋尊の本果成道時の弟子なる事

を稱歎して釋したる文て有ます此の諷誦章の實成の二字は本經に我實成佛と說て釋尊の久遠本果成道の時を指して實成と御書になつたて有ます猶又法華經本門の從地涌出品に我於二伽耶城菩提樹下一坐得レ成二最正覺一轉二無上法輪一爾乃敎二化之一令下初發中道心上今皆住二不退一悉當レ得二成佛一我今說二實語一汝等一心信我從二久遠一來敎二化是等衆一文見よ此の經文は得成最正覺とあるは正しく本果妙の成道にして本因妙の初住の成道にあらざる明白の文である然るに祖書錄內八の卷丁ヲ觀心本尊抄に地涌千界は敎主釋尊初發心の弟子なりと有り同廿五の卷十五丁ヲ太田抄にも四大士等は本因妙の時の弟子なりとあり本經と祖書とは因果の不同が有り然れば祖書は誤りに屬すべきかと申に堵中別付の大士の釋豈に誤に屬すべけん哉上行等の四大士は實は祖書の如く本因妙の時の弟子にして本師の釋尊本果妙成道の時には高位に進み法身應生の眷屬となつて本師釋尊の行化を扶助したる高德の大士て有ます然るに本經には四大士は釋尊の本果成道の時の弟子なりと說き旦つ諷誦章には最初實成の弟子なりと御書したるは大に所以が有ります法華經本門壽量品の所說十重顯本の中の開迹顯本の法門は單に佛果の上に於て本佛と迹佛とを論する法門なれば開迹顯本するには至極便宜なれば本經には得成最正覺と說き開祖は最初實成の弟子なりと御書したので有ります。久遠證得之菩薩文此の一句七字は上行等の四導師は久遠證得の古菩薩にして近世證得の人にあらざる事を稱歎して釋したる文て有ます偖て法華經に久遠の二字を說きたる事は數々有る中にて迹門に於て說きたる久遠は三千塵點劫にて中古の久遠て有ます本門に於て說きたる久遠は五百塵點劫にして大古の久遠て有ます佛敎中最第一の大古て是れより大古の成佛の人はありません設令有るにしても所用のなき佛なれば說かぬので有ます次に證得とはさとりうると讀んで上行等の四大士は久遠五百塵點劫の往昔釋尊の弟子となつて法華經本門壽量品の妙法を聽聞して事の一念三千の佛果の妙法を證得したる菩薩て有ると云ふ文の意味て有ます此の上行等の四大士は上みに於て辯しました上中下の三品の大士の中の上品の大士にして等覺深位の高級に進み登り法身應生の眷屬となつて世々番々本師釋尊の行化を扶助したる實に難有高貴の大菩薩て有ます東方金色世界の不動佛の弟子の文殊師利西方安養土の阿彌陀佛の弟子の觀音勢至又は日月淨明德佛の弟子の藥王實威德淨佛の弟子の普賢菩薩等を此の四大菩薩に比對するに猿猴を帝釋天王に比るも猶およばざるが如く然るに方今佛敎界の人々が斯の如き高貴尊重の大菩薩を信せずして卑賤下劣の觀音勢至を信じ娑婆有緣の本佛の釋尊を捨て他國無緣の彌陀等を尊ぶは不道理の世の形勢では有ませんか能說能弘の佛菩薩を捨て所說所弘の妙法を信せざれは墮在惡道は必定ならん思へは血涙潸然として止ます何と學生達哀ひべき事では有ませんが、結要傳受

之大士文此の一句十字は宗祖大聖人の所弘の妙法は其所傳遠く二千有餘年の往昔靈山虛空會上神力結要付屬の法にして其所傳の大根本有る事を歎釋したる文て有ます結要と云ふは法華經本門壽量品所顯の事の一念三千十妙廣博の法門は神力品に於て如來一切所有之法等の四句の要法に取り結びたるを結要と申します傳受とは傳の字は本師の釋尊此の妙法を上行等に傳へ受とは弟子の上行等此の妙法を受けたるを傳受と申ます撮二其樞要一而授二與之一と釋したるは結要傳受と申す事て有ます大士とは菩薩の通稱て有ます○末法弘經之導師文此の一句七字は壽量品所顯神力品結要の三秘の妙法の能弘の導師日蓮大聖人は本地久成の釋尊の弟子上行大菩薩の垂誕なる事を結釋したる文て有ます偖末法の末の字は無と訓してなしとよみます其所以は敎行證の三の中に敎のみあつて修行する人と證得する人はなきゆへに末法と申します吾が宗祖は是の如き末法の世に出現して本門三秘の妙法を弘め修行も出來ず證得も出來ぬ本未有善の人に下種の利益を與ゆる導師て有ると云ふ文の意味て有ます

法華經形體論

國友不々居士

第一章　法華の傳譯

第一節法華の渡來　歷代三寶記(長房錄)及び開元釋敎錄(唐智昇撰)を見るに、三國吳孫權の時、優婆塞支讖、佛以三車喩子經、一卷を譯出すと、之れ法華經譬喩品の別出にして法華が漢譯せられし最初のものなり。高僧傳(僧祐錄、長房錄、釋敎錄參照)によれば、支讖はもと大月氏の人、その祖父法度、漢靈帝の世、國人數百と共に歸化して善中に住す。支讖長して洛陽に遊び、業を支亮に受けたり。支亮は有名なる支識の弟子なり。漢亡ぶや、江南に逃れて吳主孫權の優遇する所となる。支讖當時大敎世に行はると雖も、經多く梵語にして、未だ飜譯を盡さず、解する者少きを慨いて、既に華戒の語をよくするを以て(彼は六國の語に精通せり)、即ち衆本を收集して、黃武二年より建興二年に至る三十餘歲に、大明度等の經を譯出せり。佛以三車喩子經はその內の一なり。されば法華は既に支讖の以前に渡來し居たりと云ふべきか。傳によれば支讖は衆本を收集したりとあり、彼の所譯大明度經を見るに、所々に師云く等の注釋を挿めり、彼が師支亮に梵本の講義を聞きしを推定すべく、彼の飜譯は大に師支亮の說に憑據して企てられしを察知すべきなり、而して彼は少時善中より洛陽に來りしもの、入竺して梵本を齎したる事蹟は、全くその傳に見へず。以上二箇の事實を綜合し來らば、彼が飜譯の原本は、之を支亮を經て、支識より受けしと想像するは蓋し最も可然的の議論なるべし。

支讖傳に云く、支讖は本月支國の人、群經を諷誦し、實經の志厚くして、漢桓帝の末洛陽に來り、(歷代三寶記には既に桓帝の即位二年に、譯經の事ありたるが如きも、二說の是非は今日に於て判じ難し)靈帝の中平年間に至る二十餘載に、携へし梵本を譯出せりと、法華は彼が所携の梵本中にあらざりしか。隨衆經目錄(法經撰七卷)及び大唐衆經目錄(靜泰撰上卷)によれば、後漢の世、支讖薩曇分陀利經一卷(法華經寶塔品少分、及提婆達多品重飜欠本)を別譯すと。この說俄に信し難く、僧祐錄、釋敎錄、及び大唐內典錄等には之を失譯の中に列ね、長房錄にはその目なし。されど現存の分陀利註一卷あり、長房錄は依用するに足らず。釋敎錄には假に西

晉の末に附し、僧祐錄には舊錄に薩芸分陀利經あり、譯人の名を失し、その源を失すと云へり。現存の分陀利經を見るにその文体正法華よりも古きが如く、處々末飜の字を存し、處々古風の譯語を用ゐたり。正法華の濡首童眞を文殊師利と音譯し、如意珠を摩尼珠とあし、江河沙を恒邊沙緣覺を辟支佛佛塔を浮圖不退轉を阿惟越地となす等は、その一例にして、一見原音を其の儘に漢譯せるを窺ふべく、頗る支讖所譯の諸經と一致する所にして、佛敎が支那に入りて未だ幾年を經ざる、譯語不足の時代の譯本たるを想像すべきなり。衆經目錄に分陀利經と同時に支讖の別譯となせる般舟三昧經(支讖譯なるは諸說一致せり)と、試にこの經を比較せば、幾分の想像を書き得べきか。又支謙所譯の諸經と對比せんに、分陀利經の般若拍を支謙は智積と意譯し文殊師利を漢に濡首と言ふと註し、羅閱祇を王舍城、辟支佛を緣覺、阿耨多羅三藐三菩提を無上正眞道と意譯せり。此の如きは元よりその一例に過ぎず以て全般を推定すべからずと雖も、分陀利經が如何に譯語に欠乏せしや、如何に飜譯の古きやを證するに餘りあらん而して一方に分陀利經を支　別譯となす法經の說あり、當時に於て幾分の根據ありしやも計り難く、加ふるに分陀利經飜譯の古風を帶せるは一層此の說を强むるものにして、よし支讖の譯せしにあらずとするも、尙その梵本中に法華の存在を想像せしむるの力あらんか。此の如き或說を生ずる、既に支讖か法華を携へし一證となすべきなり。

以上論する所文書不足の現今に於ては之れ以上の事實を發見し難く、僅に幾分の想像を以て滿足せざるべからずと雖も支謙の以前既に法華の渡來せしは確實なる所にして、即ち西曆二百二十年前に法華は支那に流布し居たり。更に支謙はその原本を師より傳へたるが如く、又支讖法華(一部分)を別譯すとの一說もあり、支謙の譯本よりも尙時代を古くせる如き分陀利經の存するもあり。之等二三の事實を綜合して、法華の渡來は實に支讖の齎らす所なりと云はんに、蓋し幾分の根據ある想像說なるべきか。若し果して然らば、法華の渡來は西曆百七十年代の事にして、支讖譯の道行般若經、般舟三昧經、首楞嚴經、大集經等と共に渡來し而して支謙によりて大明度經、阿彌陀經、維摩詰經、梵網六十二見經等と同時に飜譯せられたりと云ふべきなり。

第二節法華の梵本　記錄を見るに法華に六譯あり、三存三欠すと。是等諸譯相互の關係は如何

唐法華傳を見るに、覺愛三藏の云く、西方の相傳に、佛法華を說き玉ふ事不可說なり。品々の內多くの偈句あり。輸墨の能く記する所にあらず。但一期の機感に約して、八載を結して一部となす。略して結集すと雖も、葉一由旬の量に敷く誦文最も略せり、方丈の室に滿つと。眞諦三藏の說によれば法華に唐畧の二本ありしが如し。ネポールより發見せられし梵文法華經を、研究の結果は、長行(散文)と偈頌(韻文)とにうの文体及び文典の上に幾多の相違を發見すとは、ケールン博士の主張する所なり

蓋し法華の梵本には整足せる所謂廣本と、及び日常佛徒が暗誦して、或は自戒の訓誡を之に聽き或は敬讚の信念を發露せし所謂誦本との存在せしものゝ如く、更に暗誦用としては、散文よりも偈頌の至便なるは、言を俟たざる所なるが故に、從て自然の要求は敎義の精要を結要せし所謂畧本中、更に經の大部分、偈頌を以てなれる最畧本の生成を促せしならん。法華傳に誦本最畧と記するは、蓋し這般の消息を漏せるものか。當時文字未だ廣く行はれず、經典を多羅葉に記載するは極めて稀有に屬して、經の多くは口より口に、相轉展して傳へられぬ。現時相次て發見せらるゝ、梵典によりて、之を勘ふるも、到所に類似音の訛傳に出會するは、實に口碑轉展の結果より來れるものなり。而して法華も又他の大藏經の如く口より口に相轉展せしもの、訛轉の混入、土語方言の浸入は

免れ難き所にして、その影響を最も多く受けしは、實に暗誦用の頌本なりしなり。ケールン博士が法華經の偈頌中、土語方言の混在極めて多くして散文の雅致あるに頗る異れりと怪しめる所以は、蓋し叙上の如き事情によれるものならん。復法華の經典、文字に記載せらるゝに至りて、その長行は字句に注意して記述せられたれば、精妙なる美文は所謂中古梵文字の盛時を忍はしむるものなりと雖ども、獨り偈頌のみは、既に世に流布せる誦本の存在するあり、よし訛傳の混在あればとて、漫に之を變更するは、常時の信仰狀態に照して、敬虔なる佛徒の敢てし得ざりしは、想像するに難からず。是の如くにして、法華の中にはその長行と、その偈頌とに、文体文典を異にするの結果を生せしなるべし。かく論じ來らば、ケールン博士が、その英譯法華經の序に、言語の上より論を下して、偈頌の生成を、長行よりも略ぼ一百年以前なりと斷定せし、その同じ事實は、直ちに取りて、法華の梵本に廣略數本の存在を、證明するの證據となし得べきなり

更に西域志(釋彥琮著)によれば、昔干闐王宮に法華の梵本あり、六千五百偈なり。其東南二千餘里、遮拘槃國王宮に、華嚴、大集、摩訶般若、法華、大涅槃等の五部の大經あり、並に十萬偈なり。其東南二十里、鷲山の石崛に華嚴、法華等の十二部の經あり、皆十萬偈なり。又罽賓國(迦濕彌羅國)王宮に法華經あり、六千偈なりと

既に廣略の二本あり、又口より口に相轉展する際に幾多訛傳の生ずるあり、加ふるに先年河口慧海師が齎らせし、法華の梵本(ネポール本)中には、數葉の脫落せし跡ありしと聞く支那譯に就て勘ふるも、羅什譯の妙法華には一時提婆の一品隱沒して世に流布せざりしと云ふに非らずや。此の如き偶然の結果は此の他枚擧に假あらざるべし。されば年を經、處を異にして相轉展する際に、幾多異本の生ずるは蓋し極めて可然的の現象ならんか。西域志に或は六千五百偈と云ひ、或は十萬偈、或は六千偈と云ふは、實に印度に於て幾多の異本の存在を證明するものなり。現存の三本に就て之を見るも、一は六千五百偈一は六千、一は六千二百偈あり、その大形に於て、その章句に於て、相違頗る多くして到底同一原本の異譯なりと信すべからず。この他諸餘の大藏經の異本に就て、之を校量せば梵本の異本に關して、一層明白の概念を書き得べきなり

以上列擧せし幾多の事實によりて、法華の梵本には數多異本の存在せしは、亦疑ふべからず、支那に入りし諸譯は各々その原本を異にし來れるものと推定すべきなり。以下更に之等諸譯の系統に向て攻究する所あらん

雜報

▲第一回東部講習會の開設　本年五月定期宗會に於て可決せられたる講習會は東部第一回を來る十月一日より七日間千葉縣東金町西福寺に於て開設することゝなり左の告示を一般に布達せられたり

告示第十八號　第一教區乃至第十一教區

宗規第七則第十九條第二十條ニ依リ第一回東部講習會ヲ明治三十九年十月一日ヨリ同七日迄千葉縣東金町西福寺ニ開設ス

東部各教區布教師ハ同則第二十一條ノ規定ニ依リ必ス出席スルヲ要ス

東部各教區內寺院住職ハ參會スルコトヲ得

毎日開講時間講師及ヒ來會者規定左ノ如シ

午前八時ヨリ正午十二時迄(講演)

午後一時ヨリ三時迄(科外講演輪講若クハ討論)

同六時ヨリ七時迄

但時宜ニ依リ伸縮スルコトアルベシ

講師　大僧正　阪本日桓師　大僧正　山崎日暲師
大僧正　錦織日航師　大僧正　小林日至師
大僧正　本多日生師　僧正　齋藤顯一師
僧正　野口義禪師　僧正　今成乾隨師

一來會者ハ開會前日迄ニ其旨講習會事務所に申出ベシ

一來會者ニシテ宿泊スルモノハ其旨申出ベシ

但會場ヨリ一里以內ノ者ハ宿泊ヲ許サズ

一來會者ノ旅費及寢具ハ自辨トス

一食費ハ宗費補助費ヲ以テ支辨ス

但人員ノ都合ニ依リ其補給ヲ制限スルコトアルベシ

一講習科目ハ會場內ニ掲示ス

一講習會事務所ヲ東金町西福寺ニ置ク

右告示ス

明治三十九年九月十五日　顯本法華宗宗務廳

▲岡山教況　去る七月廿二日午後七時より、顯本法華宗篤信會に於て例月の佛教演說會あり、出席辨士及び演題は

本門の本尊と吾人行者の關係　熊代事觀師
法華經所信の方法　原田容廣師
聖祖判教の綱格　能仁事一師

去る八月十八日午後七時より、同會に於て佛教演說會あり當日は傍聽者非常に多く場の內外に滿てり、出席辨士及び演題は

統一主義の宗教　熊代事觀師
國家觀上宗教を論ず　梶木日穎師
宗旨の三大要義　能仁事一師

去る九月十五日午後より、同會に於ける佛教演說會あり、當日は尤も盛會を極む、出席辨士及び演題は

時代の變遷と宗教の正邪　熊代事觀師
宗教と恐怖心　原田容廣師
信成就の徵證　能仁事一師

去る九月十六日午後二時より、備中都窪郡撫川町楠田某の宅に於て演說會を開く、元來楠田氏は現日蓮宗信徒にして全國庭瀨町不變院塔中本了院檀頭なりしが、顯本法華宗の演說會に參聽し、直ちに自覺する所ありし歟、自宅の改革を斷行し次て正義の演說會を開くに至れり、然るに此地は例の日蓮宗側に於ける矢吹是秀師の根據地にして、日宗寺十數箇寺ありて尤も有勢の地たり、加ふるに迷信連の多き事最も甚し、時刻來れば聽衆己に宅の內外殆んど立錐の餘地なく、依て辨士の登壇あり

開會の辭　森安健次氏

予が改宗の理由を述べて宗旨の大綱に及ぶ　熊代事觀師

宗教の本義を述べて迷信の害毒を論ず　原田容廣師

本尊の眞意義　能仁事一師

各辨士は可憐なる迷信者流に對し大破折を加へらる、演說了るや兼て日蓮宗側に於ての雇ひ辨士　吉村智俊の質問を求むや、迷信連の惡口罵詈毀謗至らざるなく、依て地方の山陽中國兩新報は左の記事を掲げたり

●佛教演說會　都窪郡撫川町大字下撫川楠田某宅にて去る十六日午後二時卅分より例の顯本法華宗岡山市山崎町本行寺現住能仁事一佛教演說を開きしに同町地方は日宗本宗派の根據地の事とて衆聽森々と詰掛けさしもに廣き堂も人を以て充滿され立錐の地も無く能仁外二名の演說あり午後六時閉會を宣告するや本宗派の吉村不染其他質問せんとて四方より起ち頗る喧騷を極めたるが同町駐在巡査出張し漸く七時頃散會した

るが近々日を期して兩派の法論を催す由(山陽新報所載)

●佛教演說會　去る十六日午後一時より都窪撫川町梅田源太氏宅にて開く能仁事一原田容廣能仁事觀の三辨士日蓮宗の迷信を痛論して日宗側の吉村某質問を發し場内喧騒の極警官の厄介となれりと(中國新聞所載)

以て現日蓮宗徒の蠻的行爲を知るに足らん眞に愍むべきの狀態ならずや

▲地方各所の教光　去る九月十六日午前十時より、縣立農學校第十二回同窓會開會に就て、能仁事一師を特に招聘して講演會を開けり、當日は四百餘名の會員及び約三十名の來賓あり、能仁師は(日蓮上人の宗教と道德)と題して、一時間餘の講演ありて十分の感動を與へたり、同會にては引續き毎月講ゝ會を開催する由、尙ほ縣立師範校内に於ても毎月能仁師を聘し、日蓮上人の研究を爲す由、尙又過般來より第六高等學校内の有志青年團は、日蓮研究會を起さんとて己に會則を發表し、夫々準備中の由なれば近々發會の式を擧くる事ならん今や正しく正法發揚の時來れり、本化の大敎は益々世道の心を靈化し意義あらしむ、起てよ門下の志士、奮へ日蓮の緇素勇猛精進にして益宗家萬年の大計を忘るゝなかれ至囑々々

▲會津妙法寺再建資金の寄附額は前號に報告したるが其後更に左の諸氏より申込ありたる由にて檀家よりの寄附金額は略豫定に達したりと聞く

會津妙法寺本堂再建檀家寄附金　(承前)

一金三十圓　長谷川四郎
一金十五圓　大島半兵衛
一金十圓　川島藤吉
一金十圓　前川喜代造
一金十圓　清水富造
一金五圓　小林常三郎
一金十五圓　佐藤運三郎
一金十五圓　稻生彌五郎
一金十圓　尾關新兵衛
一金十圓　前川半左衛門
一金五圓　木村直吉
一金三圓　清水權太郎

二回合計金四百九十八圓也

大崎學報

九月三十日發行

第五號要目

○本尊論其一(本尊畧義)　桓容日智和上遺稿
○壽量顯本論其一(支那及び日本天台の異同を述へて本宗の深旨に及ぶ)　清水龍山
○法相宗の唯識論　釋覺圓
○最近歐米宗教界の傾向　ドクトル、オブ、ヒロリヒー　マスター、オブ、アーツ　河邊治六
○東洋史文獻者の奮起を促す　文學士　箭内亘
○日蓮大士の精根　付たり樗太及び大東島視察　志賀重昂
○聖祖の信仰(祖文類纂承前)　本間海解

○外に本學生の研究「聖日蓮の宇宙觀」「如何にして宗學を研究せん乎」「眞理と人」又文苑及び雜纂には文學士境野天華先生の「天華紛紛として空に舞ふ」が如き流麗にして韻致に富める文藻、古愚先生の時事に劃切にして最も趣味ある緒餘錄、其他彙報には「學林要報」「同窓會記事」「現在學生法籍簿」等あり

△本誌は當分の内毎學期(三ヶ月目)發行とす、△一冊印刷實費郵稅共金拾貳錢にて求めに應す、但し前金に非されは發送せず

△第一號は殘本なし、二號以下は前記實費にて希望に應す、但し二號に限りて紙數增加の爲め特に拾四錢とす、

東京荏原郡大崎村
發行所　日蓮宗大學林同窓會

文學博士　三宅雄次郎君序
大僧正　本多日生師著

法華經講義

(既製發賣)

和裝帙入全八冊
洋裝背皮全二冊
正價金四圓
郵稅金三十錢
臺清韓二十錢增

目次

◎序說●第一章緒言●第二章法華超勝の敎義●第三章諸種の法華經觀●第四章天台の法華經觀○第一節三師敎相の綱格○第二節十雙權實の巧釋○第三節六重本迹の大旨○第四節三法々躰の解釋○第五節待絕二妙の解釋○第六節一念三千の妙觀●第五章日蓮の法華經觀○第一節本化別頭の敎相○第二節但令用實の活斷○第三節應身常住の妙義○第四節佛界緣起の妙旨○第五節究竟圓慈の活釋○第六節聲色爲經の眞義○第七節唯一本尊の光顯○第八節信念成佛の要道○第九節南善一貫の活論○第十節台當敎相の異目○第十一節身讀法華の壯觀●第六章天台講經の要義○第一節四敎五時の統釋○第二節五重玄義の妙解○第三節法華釋經の科段○第四節悉檀運用の活釋○第五節文々四釋の廣釋●第七章日蓮講經の要義○第一節日蓮上人の學風○第二節本化獨特の五玄●第八章妙法華傳譯の概略◎釋文●科段●來意●大意●釋題●文々解釋○通解○妙解○異解○批判○質議○解決○字義○參考○讃唱

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛敎敎觀の實歸にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、敎法觀、行法觀、その他敎相敎義の全般に亘りて之を調整し、發揮せるもの、苟も佛敎の眞意を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也

古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛敎の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛敎研究の上に現代及未來の光明たらん矣

(發行所賣捌所は裏面にあり)

文學博士 姉崎正治君序
大僧正 本多日生師編

聖語錄

（既製發賣）

洋裝九百頁
特製金壹圓拾錢（目下品切）
並製金七十五錢
郵稅金拾錢

目次

○第一發心篇○總要○感應○實在○懺悔○道義○推理○第二敎相篇○總要○內外對○權實對○絕對判○第二佛陀篇○三德○顯本○應現○休相○智慧○慈悲○功德○刀用○權佛○餘論○第四敎法篇○總要○敎法○信仰○觀念の攝得○結歸本佛の三輪○第五人身篇○通說○理具○事具○結歸○第六法界篇○通說○迹門○本門○結歸○第七本尊篇○總要○諸宗○佛陀○敎法、總持、觀念○本佛の三輪○第八行法篇○總要○信仰○安心○道義○總要、報恩、慈悲、戒法、人道、忠君、愛國、孝養、師長、夫婦兄弟正直、勤勉等○弘通○第九得益篇○總要○絕對の益、順次成佛、即身成佛、女人成佛○相對の益○第十批判篇○總要○迦葉、阿難等○龍樹天親、無着○天台、妙樂、傳敎、慈覺、智證、末學○羅什、法護○光宅、嘉祥、玄奘、慈恩（涅槃、三論、法相）○華嚴宗○眞言宗○淨土宗○禪宗○律宗○第十警策篇○對內○對外○第十二訓育篇○第十三祖傳篇

法華は佛敎の綜合歸一を宣し、聖祖は各宗の積榾統一を唱へたるもの、その敎義の深遠に、且多方面にして、眞意を正明に會得し難きは、實に宗の內外に於ける古今の嘆聲なりき。本書は法華の三部及祖書全集に就て、之を整然たる組織の下に類聚編成せられたるもの、研究の士も布敎者も信徒も必ず一讀すべき日宗の聖典なり

發行所 東京市淺草區南松山町 統一團社
東京橋南傳馬町三丁目 泰江文書店
仝 麻布飯倉五丁目 森倉屋書店
仝 淺草廣小路 淺倉屋書店
東京府在原郡池上村 日宗新報社
京都寺町二條妙滿寺中 法光院

賣捌所 東京市京橋區南傳馬町 須原屋
京都古門前縄手三吉町 大賣捌所
大坂東區心齋橋安土町北 村上貞藏
横濱市蓬萊町一ノ三 加々善書店
岡山市下ノ町 統一新聞社
仝 市上ノ町 入江勝十郎
久城茂太郎

文學士小林一郎君序米人ヴォー氏講並賛
日宗新報記者小泉要智君著

聖日蓮之文學觀

菊判二百頁美裝特價金四拾五錢郵稅六錢

物質文學肉慾文學旺盛の時代に於て此心靈文學權威文學を鼓吹せんとする著者の微衷を諒せよ日蓮文學は鎌倉文學の華なり日蓮文學は人格の活動なり血と涙とを以て染め出されたる大文學也脂肪文學淫卑文學に飽ける人々は須らく此雄渾壯大なる心靈文學に接して心田の枯涸を潤せ本書は文學のレンズを透して日蓮上人の人格を偲ばしめ由て以て時代が要求しつゝある何物かを供給せんとするものなり

○法華經大觀は著者旅行の爲め發行延引の處頃日歸京に付來る十五日頃には發行可相成に付陸續御購讀を乞ふ

發行所 東京京橋區南傳馬町三丁目 須原屋書店

▼粗製の類似廣告あり御注意

秋期御見舞の好適品

弊堂製品の眞價に就ては世既に定論あり此際一層の奮勵を以て平素の御高庇に酬いんと欲す左記手續により續々御注文を賜へ

◉眞正宇治茶◉

宇治茶製造元

（一）表中の茶名と斤數御通知あらば直に送品す（二）代金は前金又は小包郵便代金引替とす（三）遞信省振替貯金口座に加入しあるにより此方法にて注文せらるゝ時は最便利に且安全なり（四）代金壹圓以上御注文用紙は御申込次第何枚にても送付す但清韓臺灣は小包一個に付金廿錢の增稅だけ御負擔を乞ふ

山城綴喜郡草內村 古川專太郎 振替貯金口座一〇〇四番

新發明

古名の出るまり

吉鐘

東京麻布笄町
本舗 吉田萬珠堂製

●將校軍人 ●教 師 演說家
●僧 侶 ●音曲家 ●謠曲家

定價 金十錢 二十錢 五十錢 壹圓

右定價廿錢以上へは極て美麗なる丸樂入及揚技入兼用の物封入進呈仕候

●各地有名の藥店にあり若し賣切の節は直接御注文被下度全國內は無遲送料

東京兩國米澤町
本舗 吉田萬珠堂製

（三法堂目印）

●木偶具 金佛具 木像 厨子 大販賣

佛書表具の元祖
各宗御寺院御入用
品一切阿にても多
少に不限御注文仰
付らるべし佛書は
申すに不及御肖像
書專門

●木魚位牌卸小賣

小包條例附
郵券四錢

注意

佛具佛像位牌木魚其種類品有之候を以て一々記載する能はず依て特に佛書正價附發賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は郵券四錢御送付被下候はゞ迅速進呈仕候此の目錄御用ねなれば寺院樣方の御入用品一切の買物遠方でも座ながら安價にて買はれ升早く取よせ御覽あれ

三法堂諸品發賣目錄（正價付）

●佛具太鼓 ●佛具金物 ●一切金屬子 ●一切中啓 ●釣鐘 ●大般若經 ●一切藏經 ●理趣分 ●曲錄 ●佛子 ●敷打 ●引水 ●木像厨子 ●平刷 ●臺 ●盛物 ●板水 ●鉢自 ●量器 ●鉢應 ●行膳 ●臺器 ●茶經 ●獻 ●文庫 ●靈 ●具類 ●正價にして御買 ●並に椀 ●三寶膳 ●屋根 ●木華 ●唐幡 ●珠數 ●人天蓋 ●懸盤 ●樂器類 ●雪洞 ●施餓鬼幡 ●幢 ●金 ●彌陀 ●和幡 ●香 ●位牌 ●佛具 ●皮 ●大傘 ●屬子 ●臺 ●菓子 ●字 ●人 ●經机 ●茶臺器 ●箸 ●匙 ●高皿 ●袈裟 ●ながら自由自在 ●物座

各宗御寺院御入用
大各書表具師
佛師
橋東町
入

京都小橋三條
通中島町西入
全

三法堂
藤田總治
三法堂陳列場

脳脊髓 精神病 帝國腦病院
東京市神田區和泉町
電話下谷七一七番

院長ドクトル齋藤紀一明治卅三年專門學研究の爲め獨逸へ留學卅六年同大學卒業尙進て英佛專門病院を視察兩院にて診察す

精神病專門 青山病院
東京市青山南町
（電話新橋三六四五番）

本郷根津 眞泉病院
（電話下谷四三九番）

婦人科產科 醫學博士 千葉稔次郎
醫學士 中島襄吉
內科 學博士 野村華造

本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢、十二冊前金六十五錢、郵券代用は一割增但五厘切手も可とす
一講讀申込の節は住所姓名を明書にて認めらるべし
一本誌代金拂込は振替貯金に依らるゝを最も便利とす、拂込用紙は最寄郵便局に請求し受取らるべし

廣告料

一頁	半頁	四分ノ一頁	特別廣告
拾圓	六圓	三圓五拾錢	十五圓ヨリ廿五圓マテ

明治卅九年九月十五日印刷發行

發行所 統一團
東京淺草區南松山町四十五番地

發行人 井村恂也
編輯人 山根顯道
印刷人 鈴木曄學
印刷所 北澤活版所

統